栗ひろひ週間

槇本楠郎

青空文庫

「おい〳〵、みんな、よう聞け。今日はもう三時まへだから、通草をとつたり、野葡萄をとつて食つてちや、あかんぞ。今日は、一番おしまひの日だからな。一人が四合以上ひろふんだから、ひろつた栗は、一つだつて食つちや、あかんぞ。」

　鎮守の裏山の雑木林にさしかゝると、もうあちこちに、栗の木が見えだしました。六人づれの先頭になつてゐた高一は、坂道をわざと後向きに登りながら、ガヤ〳〵さわぐみんなに、かう云ひました。この六人の男の子たちは、「栗ひろひ週間」のためにつくられた、五年生の第四組の者で、高一はその組長だつたのです。

「だつて高ちやん、おれはこの前、誰よりも一番よけいにひろつたんだぞ。ちつとぐらゐ遊んだつて、がまんしてくれよウ。」

　さつきから野葡萄ばかりさがしてゐた金太がさう云ふと、銀色の穂薄で頭をたゝき合つてゐた勇治と庄吉とが、すぐ口をそろへて云ひました。

「そんならぼくだつて、一番はじめの日は一升一合もひろつたんだから、がまんしてくれろ。いゝかア、高ちやん、組長?」

「よし、勇治、許してやる。ぼくだつてな、あのときは一升ぢかくひろつたぞ。それから二度ひろつたんだから、もう二升以上もぼくだけでひろつたい。よくひろつたなア、庄吉。よし、庄吉も許してやる。少しぐらゐ遊べエ。」

「ああ、ありがたい〳〵！　ぼくにもお許しが出たアい！」

　さう云つて庄吉は、ドカ〳〵と坂道をかけ登つて、まだ後向きで歩いてゐる高一のまん前に行つて、クルリと向き直ると、ペロッと赤い舌を出して、後向きのまゝ歩きだしました。すると勇治も金太も多喜二も、一番小さい松雄も、みんなそのとほりの真似をしました。と思ふ間に、庄吉がすべつてころんだので、せつかく後向きになつて舌を出したばかりの四人も、バタ〳〵と尻餅をついて、将棋だほしにころげてしまひました。

「ほれ見ろ、罰があたらア。ハハア！」

　高一が上から見下して笑つたので、みんなムクムクと起き上りました。そして色のさめた服や着物の尻をさすりながら、とり落した栗むきのヘラ棒や、下へころんで行つた竹籠を素早くひろひ上げました。

「いてエ〳〵。だが、面白かつたなア。」

「うん、面白かつたい。」

「尻が痛くて、面白かつたなア！」

　みんなニヤ〳〵笑ひました。

　道の両側には薄の穂がゆれ、あちこちに女郎花や萩の花が咲いてゐます。その間をくぐつて行くと、雑木林をもれる黄金色の秋の陽が眩しくキラ〳〵と、肩先や足下でゆれ動きます。てんでに栗の木をさがして空を仰ぐと、実のある栗のイガは見つからずに、高いところを白い雲が、しづかに舟のやうに流れて行くのが見えました。

「もう、あかんぞ。みんなのひろひかすだから、栗はないや。」

「よく見ろよ、あるぞ、あるぞ。ぼく、もう三つひろつたい。」

「ほんとかア？　早いなア。一つくれ。」

　すると高一が、林の向ふの方から呼びました。

「おうい、あるぞ〳〵。みんな、こつちへ来てひろへエ。こゝだ、こゝだア。」

　みんな、その方へ走つて行きました。

そこは笹の茂つたところでしたが、あたりに三本も大きな栗の木が枝をひろげてゐるので、足で笹を踏み分けてさがすと、イガに入つたまゝの瑞々しい栗や、まだ朝露にぬれてゐるやうな艶のいゝ栗が、そこら中にころがつてゐました。

みんな尻を立てゝ、かけまはつてひろひました。誰かが、つづけさまに屁をたれると、みんなが囃したり、笑つたり、歌をうたひました。けれど誰も手を休めず、ドン〳〵、栗をひろひました。

そこをひろひをはると、みんなは、もつと山奥へ入つて行きました。こんなところまでは、めつたに子供だけではひろひに来ないので、ずゐぶん栗がおちてゐました。

みんなの籠は、すぐ重くなりました。

「おい高ちやん、もう、やめようよ。」

「そや〳〵。もうやめて、遊ばうよ。」

みんな少し疲れて、退屈して来たのです。

「それより、ぼく、栗を食べたいな。腹ペコなんだよ。感心にも、今日はまだ一つも食べないんだぞ。」

「よし、食へ。よう高ちやん、みんな三つづつ食ふことにしようよ。今日は、ずゐぶん奮闘努力したんだから。なア、おい、食ふ権利があらア。」

「さうだア、権利があらア。」

「五つ食ふ権利がある！」

「さんせい！　五つの方に賛成！」

みんな勝手にしやべつて、勝手にきめてしまふので、高一は可笑しくもあり、面白くもあり、だまつてニヤ〳〵笑つて見てゐました。

みんなは環になつて坐つて、自分の籠の中から、なるべく大きいのを択り出して、その皮を前歯でむくと、中の渋を拇指の爪や、前歯でとつて、とてもいゝ音をさせて、カリ〳〵と食べだしました。

「ほんとに五つだけだぞ。ごまかしては、あかんぞ。いゝかア？」

さう云つて高一も、なるべく大きな栗を五つだけ択り出して、みんなのそばへ坐ると、その皮をむき、渋をとつて、カリ〳〵と食べはじめました。

この村では、こんどの戦争で、ずゐぶん大勢の兄さんやお父さんたちが、遠いところへ戦争に出て行きました。そして、いつ帰つて来られるかわからないのです。だから学校へ上つてゐる子供たちの中には、鉛筆や紙や帳面や、クレヨンなど買つてもらへない者が、だん〳〵多くなつて来るのでした。そこで学校の先生は、いろ〳〵と考へられた末に、「イナゴとり週間」と「栗ひろひ週間」とを、学校中の生徒でやることになつたのでした。

「イナゴとり週間」といふのは、この前の前の一週間でした。どの学級でも、となりの家の者同志が五人から十人で一組になつて、その中から組長を一人だけきめます。そしてその組の者は、みんなで相談して、その「週間」の間に四度だけ、学校が退けるとすぐ、みんなでイナゴとりに行くのでした。イナゴといふ虫は、お米のできる稲をあらす悪い虫ですが、それは煎つて食べるとおいしいので、近くの町へ売れるのでした。かうして一年生から六年生まで、みんないつしよに働いて、とても良いことをして、それで一人が八銭づつも儲けたのでした。

「栗ひろひ週間」は、イナゴとりが大へんうまくいつたので、すぐ同じやり方で、この週からはじめられたのでした。この村には「柴栗」と云つて、実の小さな山栗の木があつて、誰でも勝手にひろつ

ていゝのですが、今、村では大人の男の人が少いので、どこの家でも田圃の仕事が忙しく、栗ひろひなんぞしてゐられないのです。ひろつて売れば一升が十五銭ぐらゐには売れるので、これを今みんなでひろつてゐるわけです。そして今度は、この栗を五年生と六年生とで、近くの町へ売りに行くことになつてゐるのでした。

「おい、もう二つづつ食ふことにしようぢやないか？　五つぐらゐぢや、歯糞になつてしまはア！」

一番早く食べをはつた金太が、もう大きなのを二つ択り出して、今にもその皮を前歯でむきさうにして云ふと、すぐ勇治と庄吉とが賛成しました。

「さうだ、さんせい！」

「もう二つ食ふ権利があるぞ。」

すると高一が、膝小僧をかゝへたまゝ、ニヤ〳〵笑ひながら云ひました。

「おい〳〵、もう、よせよ。だらしがないな。そんなに権利を追加してると、きりがないぜ。」

「ぢや、統制をやるか？」

「だつて、今日は、みんな五合ぐらゐひろふ予定だつたのに、みんな七・八合もひろつてるんだぞ。二つ三つぐらゐ、なんだい。ケチ〳〵云ふなよ。高ちやん、きみも食へ。ぼくが許してやる。」

金太がさう云ふと、庄吉もつづけました。

「ぼくも許してやる。なア、おい、みんな、もう二つづつ食ふことにしようよ。」

「仕方のないやつらだな。ぢや、もう二つだけ、食ふ権利があることにしよう。だけど、ほんとに二つだけなんだぞ。あとは、統制だ！　おい、みんな、よう、わかつたな？」

高一がさう云ふと、金太と庄吉とは手をあげて、「はい、わかりましたア！」と、ふざけました。

みんなは、また二つづつ食べることになりました。

それを食べをはると、みんなは、もう栗ひろひに飽いて、何か面白い遊びをしたくなりました。けれど、もうお日さまは西の方に傾いて、あまり遊ぶひまがありません。帰つて風呂焚きをせねばならぬ者もあります。

そこでみんなは、野葡萄や通草をとりながら、山をくだつて行くことになり、てんでんバラバラに、雑木林の麓の方へおりて行きました。なかにはドラ声をはり上げて、軍歌をうたふ者もあれば、キヤッ〳〵と猿のやうな声を出したり、狼やライオンのやうな咆え真似をしてゐる者もあります。

高一は一番小さい松男と二人で、やはり栗をひろひながら山をくだりました。すると、今日登つて来るとき、みんながすべつてころんだ坂道の近くへ出た頃、下の方から呼ぶ声が聞えて来ました。

「おうい、高ちやん、早く来てくれエ！　金ちやんの目玉へゴミが入つて、見えてるけど、とれないんだよウ！」

高一はニヤ〳〵笑つて、「目玉ぢやなくて、目なんだらう？」と呟くと、大きな声で下の方へ答へました。

「おうい、すぐ行くから、あんまりいぢらないで、じつとしておけエ！」

そして声の方へかけおりて行きました。

「どうしたんだ？　どれ〳〵。」

高一はそばに行つて、やんちやな金太の右の目をのぞきこみまし

た。指先でひきはたけて見ると、もうどこにもゴミらしいものはありませんが、だらしなく涙が流れ出てゐます。

「おい、ないぞ。もう出たんぢやないか？　パチパチして見ろ。痛いか？　痛くないか？　なにまだ痛いつて？　よし、ぢや、ぼく、マジナヒをしてやらア。」

それから高一は、口の中で、「奥の山の爺と婆ア、金太の目へゴミが入つた、貝殻杓子で掬うてくれ！」と唱へて、ひきはたけた赤い目の中を、不意にプウツと強く吹きました。

金太はびつくりして、ピョイと立離れて、目をパチクリさせました。

「出たか？　まだか？」

「う、うん、まだ……コロ〳〵する。」

「よし、ぢや、こつちへ来い。どの辺がコロ〳〵するんだ？」

「右の端の……上の方だ……」

「よし。」

高一はさう云つたかと思ふと、自分の口を服の袖で拭いて、二三度唾を吐きました。それから金太の目をグッとひきはたけると、自分の口をおしあてゝ、舌の先で目の中をなめまはし、唇で酸つぱい涙を吸ひとつてやりました。そしてペッ・ペッと唾を吐きながら、金太にたづねました。

「こんどは、どうぢや？」

金太は目玉をグル〳〵まはしたり、パチ〳〵させてみてから、ニヤッと笑つて、うれしさうに答へました。

「こんどは……出たらしいや。」

それを聞いて、いつの間にかそこに集つて来てゐたみんなも、ホッとしました。

「ぢや、きみは、ぼくについておりて来いよ。足下に気をつけるんだぞ。」

高一はさう云つて、金太をつれて坂道をくだつて行きました。みんなも、そのあとにつづきました。そして鎮守の下の野良道へ出ると、高一は、すぐ横の畑で里芋を掘つてゐる赤いタスキをかけた、新屋の小母さんを見つけました。そして、かう云ひました。

「をばさん。をばさんは、お乳が出るんでせう？　だつたら、金ちやんの目へ、ひとしづく入れてやつとくれよ。目にゴミが入つて、おれがとつてやつたんだけど、まだ、まつ赤になつてるんだよ。」

すると、まだ若い小母さんはきれいな顔を上げて、少しきまりわるさうに笑つてから、かう答へました。

「あら、それはかはいさうぢやな。いゝとも。どれ、入れてあげよう。」

さう云ひながら、小母さんは赤い夕焼空のうす明りの中を、畦づたひに道まで出て来てくれました。

そして着物の胸をひらいて、大福餅のやうに白いプックリふくらんだ右の乳房を出して、その先の白苺のやうな乳首を二本の指にはさむと、金太の赤い目をひらいて、ポト、ポト、ポトと、白いお乳をしぼりおとしてくれました。

「もう、よいかな？　よからうな。」

小母さんはさう云つて、まばたきをする金太の顔を見ながら、だいじさうに乳房をかくしました。

「よし、もうこれで大丈夫だぞ。金ちやん、お礼を云ひな。」

高一にさう云はれて、金太はだまつて頭をさげました。

見てゐたみんなは、ニヤ〳〵笑ひました。

「あんたら、栗ひろひに行つたの？　どれ〳〵。ほう、たんとひろつたなア。」

小母さんは、みんなの籠の中をのぞいて見て、さう云つて畑へおりて行きました。

「だけどなア、をばさん。この栗は食べられんのぢや。学校へ持つて行つて、みんな売つてお金にするんぢや。」

「あゝ、さうか。『週間』の栗ぢやな。それア、いいこツちや、いいこツちや。」

「ぢや、さやうなら。をばさん、ありがたう。」

「をばさん、ありがたう。」

「さやうなら！」

みんながさう云つて歩きだすと、小母さんはうす暗い畑の中にしやがんで、もうセツセと仕事をしながら、見向きもしないで、だがやさしい声で、かう答へました。

「みんな、あそばずにお帰りよ。どこの家も忙しいんだからな。」

―昭和一二年九月十四日作―

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　三〇巻」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「猫と誕生日」冨山房百科文庫、冨山房
　　1939（昭和14）年12月
初出：「お話の木」子供研究社
　　1937（昭和12）年11月
※表題は底本では、「栗《くり》ひろひ週間」となっています。
※底本は新字旧仮名づかいです。なお促音の小書きの混在は、底本通りです。
入力：菅野朋子
校正：雪森
2014年6月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

栗ひろひ週間

槇本楠郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/